子どもアドボカシーは生活の中に

「子どもはしつけや指導がされるべき存在」という認識では、しつけや指導する側のおとなと、される側の子どもで権力関係が発生します。権力関係があるところでは、力の弱い人の声が聴かれにくい現実があります。実際、家庭や集団生活の場、教育現場で子どもの声はしっかりおとなに聴いてもらえているでしょうか？

おとなが勝手に決めた事情や声を聴いたおとなの価値観にそぐわない子どもの声は聞き入れてもらえないことが多々あるように感じます。また、おとなの事情や価値観を押しつけられて、子どもは有無を言われずそれを受け入れないといけない状況に置かれることもあります。おとなは自分に良いと思うことは多くの選択肢から自分で選んで決めます。子どもも同じように自分に良いことは子どもが一番よく知っています。だから、本来「子どもに良かれは子どもが決める」ことなのです。

私たちアドボケイトは子どもの力を信じています。

（NPO法人子どもアドボカシーセンターOSAKAＨＰより抜粋）

私たちは、親として、学校などの関わりの中で、疑問を持つことがあります。子どもには「先生と話してみようか」と促したり、子どもが「言わないで」と言っても「大事なことだから教頭先生には伝えよう」とやりとりしたり。これは子どもにとってどうなんだろうと迷い、子どもの言い分を尊重しようと考え、子どもの力を信じようと思いながら。

次の話を聞きました。

5歳になったＡさんは、親が書いた誕生日カードの『Ａのことが大好きだよ』メッセージを見て、「これは分かってるで！」と言ったと聞きました。ある夜寝る前、親に、「こども園で叱られたら絶対にあかんねんで。先生に怒られたら、遠足行かれへんし、3歳のクラスになるんやで」と、しょんぼり話したそうです。

話がよく分からなかったので、親は翌日副園長に間に入ってもらった上で、担任に聞いてみることにしました。

担任は、「手洗い中に床が濡れることが続いたので、3歳組さんはできているのにどう？」などと全員に対して話をしたとのことでした。

そう聞いた親は、「今の様に、子どもにもわかる言葉で説明されましたか？早く解決しなくては！と、威圧的な態度だったのではありませんか？」と。

親が一歩踏み込んだ話ができたのは、子どものことを理解してくれている副園長への信頼があったからでしょうか。

副園長は担任に、「おとながそう伝えたつもりでも子どもにそう伝わっていないのなら、それは言い方を改めるべき。1日の振り返りの場は、子どもたちに現状をなげかけて、これについてどう思うかを、まずは自由に意見を出し合い、その中で一つに答えを決めるのではなく、いろんな意見が出る環境をつくることが大切～」などと話してくれたそうです。

親はそれを聞いて納得。担任と副園長は、「3人で話す場を持ててありがたかった」と。そして…

親が話した翌日、こども園から帰ったＡは、「今日はめっちゃいい日やったわぁ！先生、一回も怒ってへんかってんで！！」と少し驚いた顔で、うれしそうに話したそうです。

このページをまとめながら、ある講座での講師の話を思い出しました。
子どもへの声かけで、その言葉はおとなにでも同じことを言いますか？と。
おとなに言わないことは子どもにも言わない!!「遠足行けない」なんて、ウソやし、3歳のクラスになんてならないし。
おとなも尊重！子どもも尊重！

共同子育て連絡会通信 4号

2022年10月

共同子育て連絡会通信4号は、倫理綱領学習会part3の報告をまとめました。加えて、次回学習会でおじゃまするNPO法人子どもアドボカシーセンターOSAKAのHPから考えたことを綴っています。

私たちは、通信に寄せてくださる声（子どもの声を含め）を綴りながら、語り合い、一緒に考え、読んでくださるあなたから学ぶことが多くあると感じています。どのようなことでも、気軽に聴かせてくださいね。

きらぽか広場の【とびだせひろば10/21】におじゃまんぼうしました。
写真は、実の付いたアカシアの木です。

身近な近隣の公園。
子どもと木々を見上げ、葉っぱや実を手にします。子どもが地面のアリを発見！
森山先生は、子どもにおとなに、次々と語りかけてくださいます。
教えてもらうことからの発見にわくわく。
自然の中で、たのしいひとときでした。

倫理綱領学習会　part４

日　時：2022年10月29日（土）10時～12時
場　所：子どもアドボカシーセンターOSAKA（堺区新町2-4　2階）
　　　　及び　Zoom
対　象：どなたでも
参加費：無料
内　容：part３の続きから、倫理綱領４を読みあう。
　　　　オブザーバー：田中文子、山下裕子
申込み：準備の都合上10月25日までにご連絡をお願いします。

公益社団法人子ども情報研究センター「共同子育て連絡会」合田由紀子　南田安紀子
電話：06-4708-7087　　メール：renraku@kojoken.jp

倫理綱領学習会　part３報告

（2022年7月30日）　出席13人

♪夏のしりとりうた♪に続いて、
好きなもの言ってみよう~の自己紹介。
倫理綱領 ３を順に読み合いました。

互いの経験に学ぶ中から創造していく　パートナーシップを（倫理綱領３－３）

1997 年、子どもの権利条約を社会に根づかせる子どもとおとなの協同企画として「子どもの人権」大阪会議を開催。そこで、子どもとおとなで問題提起の寸劇を演じることになった。直前になって２人の子どもから、「子ども情報研究センターは、子どもの人権を侵害している」と、抗議を受けたと書かれていて、どの様な状況だったのだろうと話しました。

その時の様子を聞きながら、子どもの権利について議論していこうとする姿勢の人たちが、子どもとおとなで話し合いながらつくってきた経過があったことを知りました。そして、倫理綱領にあるように、子どもと対話する関係をつくり続けていきたいと感じました。

他にもこんな話が出されました。

子どもにかかわる活動をする時、子どもにとって良かれと声をかけたり、〇〇しなければならないという概念はもたないでおこうと思ってきた。それが、子どもとのパートナーシップにつながるだろうと思って。

広場の中で、おもちゃの取り合いがよくある。「順番にできるかな」って言っているけれど、スタッフの中で意見は違うとの話もありました。目の前にいる子どもとの状況も違う。できるだけ、子ども双方の気持ちを受け止めたい。その上での順番の提案なのだと感じました。

公益社団法人子ども情報研究センター　倫 理 綱 領

１．私たちは、1977 年２月乳幼児発達研究所設立の精神を継承します。
２．私たちは、子どもの権利条約を共通の基盤として連帯し活動します。
３．私たちは、 子どもとおとなのパートナーシップを 不断に求め実践します。
　１．子どもにふさわしい世界はすべての人にふさわしい世界
　２．子どもたちから求められているパートナーシップ
　３．互いの経験に学ぶ中から創造していくパートナーシップを
　４．子どもの権利条約の一般原則に根ざすパートナーシップを
４．私たちは、平和と人権をグローバルな思考とローカルな活動を通して希求します。

子どもとおとなのパートナーシップをどう考える？

主体と主体の相互関係をつくることとあるが、自分のことをどう伝えようとするのか、相手のことをどう知ろうとするのか。

おとなは、かたちや時間を気にしてしまうところがある。おとなにも気持ちがあって、それを感情的に伝えると子どもとぶつかる。

日常の中で、子どもとのかかわりに葛藤しながらも、どうやりとりしようかと考えることが大切なのかな。いろいろ迷いながら、自分にOKをだしていこうと思う。

相談とは？聴くとは？

電話相談で話を聴いてもらうということを、子情研で初めて知った。チャイルドライン、ファミリー子育て何でもダイヤルを、「相談」としていないことに、かける人・受ける人の主体を感じる。２つの電話は、どんなことでも安心して話していいんだよと場を開いている。きらぽか広場では、「たそがれタイム」を月１回設定して、ちょっときいて～の場をつくっている。

パートナーシップを考え、場を開いていく時、いろんな『聴く』を学び合いたいと思います。

学習会当日レジュメ　私たちは、何のために活動している？
元気な親が増えたらいいな　　子どもにとっても出会い
誰もが主体　　子どもから学ぶ

共同子育てこぼれ話
～子どもとおとなのパートナーシップ編～

一時保育で、2歳児が食べながら後ろに座っている子どもの方を何度もふり返ります。保育者は、気になるのだったら、テーブルの反対に来たらどうかな？と、移動するように促しましたが、とたんに、床に突っ伏してしまいました。

そこで、抱っこし、少し離れた場所で話しました。何かを感じてくれたようで、違う席に戻って食べてくれました。

私の話を聴いてくれてありがとう！

保育所で4～5歳児が、レゴブロックを思い思いに組み立てて遊んでいました。ある時、遊んでいるパーツが転がり、固定している棚のすき間に転がり込んでしまいました。ふたりの子どもが長いものを探して何とか取れないかと、あれこれするうちに、工夫が遊びに変わり、楽しくなってきます。もっと長いもの～と探そうとしたときに、集合時間になりました。すると、子どもたちは、「あきらめたくない」と言います。

そうやね。

諦めたくないと気持ちを聴かせてくれてありがとう！

子どもとおとなのパートナーシップのために

子どもにふさわしい世界を考える時、子どもたちは私たちも考えるから、おとなも考えてよと言ってくれているような気がします。

子どもの権利条約で一番に浮かぶのは、子どもの意見の尊重に基づく子どもの最善の利益。おとなが、子どもの最善の利益を考える時、出会った子どもと話し合いながらでないと考えられない。そうするためには私たち自身、自分との対話が必要で、時間も言葉も健康も必要なのだと思う。

自分と対話する機会が、子情研の活動の場でのミーティングや学習会、『はらっぱ』での対話なのでしょうか。そういう意味でも、私たちはつながりの中で、活動しているのですね。